東北学院大学
# チャペルニュース
春季特別伝道礼拝
特　集　号
第101号　2007年6月
東北学院大学宗教部
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
〒980－8511（022）264-6428

●巻頭言●

## 「心によって」

宗教部長　佐々木　哲　夫

人物の印象は、大部分、初めて会う数秒から数分の間に、すなわち、第一印象によって形成されると言われています。その場合、特に、視覚経由の情報は重要です。顔の表情、目や体の動き、髪型・服装・爪・足元の身だしなみなど、会話という聴覚経由の情報を提供する以前に、かなりの量の情報が発信されているからです。人は、外観によって人を判断しがちなのです。それは、現在だけのことでなく昔からのことでした。

時代を遡ること約三千年、イスラエルの王を選ぶときのことです。預言者サムエルは、神から「エッサイの息子の中から王を選ぶ」との託宣を受けました。そこで、早速、エッサイの家に行ってみました。エッサイには八人の息子がいます。その中の一人エリアブを見たとき、サムエルは、これこそが神の選んだ王であると判断しました。しかし、その時、神は「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るように

は見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」（サムエル記上一六章七節）と語ったのです。人は外観を見ます。しかし、神は、心によって判断するというのです。

さて、「主は心によって見る」の部分を、以前の口語訳聖書は、「主は心を見る」と翻訳していました。両方の翻訳とも文法的には可能です。しかし、本稿では、文法的議論を省略し、前者の翻訳について考えたいと思います。「心によって見る」のですから、相手のことだけでなく、見る者自身の心が重要になっています。換言するなら、神は、どのような価値判断をもって人を見るのか、もしくは、

外観ではなくどのような心に価値を見出すか、が重要になってきます。神の価値基準をわきまえておくことは、見られる立場にいる者には必要なことだからです。示唆を与えてくれる聖書箇所を引用します。新約聖書「…これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」（ガラテヤの信徒への手紙五章二二―二三節）。霊の実は、心からあふれ出て、必ずや、人の身だしなみや会話という外観に現われてくることでしょう。「主は心によって見る」の言葉を私たちの言葉にもしたいものです。

# 「孤独―神の前にひとり立つ」

東京神学大学神学部准教授
中野　実

私たちは現代社会において多くの情報によって振り回されている。多くの情報の中で流され、人々の集団の中に紛れ込むのでもなく、まわりに無関心になって見えない存在になるのでもなく、社会の只中で自分を失わずに、自分を確立する道はどうしたら見出せるか？それにはじっくり自分自身を見つめる機会が必要である。私たちは一人一人が「かけがえのない存在」である。一人一人が唯一無比な人生を与えられている。誰も代わって生きてくれない。その意味で私たちは「孤独」である。そんな「孤独」の認識なしに私たちは成長できない。

キリスト教を信じるとは、物事を新しい視点で見直すことである。例えば「自分」に関して自分自身が見ている「自分」が本当の自分なのか？それとも、まわりの人たちが見る自分の姿が本当の自分なのか？様々な自己理解の間で振り回されて迷うことが多い。しかし、聖書はそれらとは全く違う新しい視点を私たちに示す。それは、万物の造り主である神の視点である。聖書によれば、神の独り子であるイエス・キリストを通して、神がどんなまなざし（視点）をもって私たちを見つめ、どんな御心をもって私たちを導こうとしておられるのかを知ることができる。

そこでパウロの言葉に注目したい。彼はもともとキリスト教の迫害者であった。しかしその彼がキリスト者に回心する。その経験は独り神の前に立たされる経験であり、それによってパウロは自分の姿を全く新しく理解するようになる。彼は言う。「しかし、今は神を知っている、いやむしろ神からしられている」（ガラテヤ四・九）。私たちは「自分が一番自分自身のことを知っている」と考えがちである。しかしそんな固定観念から自由になって「私は神から知られている」という事実に自らを解き放つ時、今まで知らなかった新しい自分の姿が見えてくる。さらにパウロは言う。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ二・二〇）。イエス・キリストという存在は不思議な存在である。見方によっては、キリストは弱い、情けない存在だ。紀元一世紀のはじめローマ帝国への反逆者として十字架において処刑された犯罪者である。パウロは始め、そのキリストを信じるキリスト教を馬鹿げたものと見なした。しかしパウロはそのキリストの中に不思議な秘密が隠されていることを発見するに至る。それは弱さ、みじめさの只中に現れる神の力である。私たちの視点を変える力は、イエス・キリストという人格の中に隠されている。私たちは人生の歩みの中で必ず失敗、挫折を経験する。しかし弱さ、惨めさの経験は無駄な経験ではない。弱さ、惨めさの経験の只中にあって私たちの造り主である神が出会ってくださる。その事実をイエス・キリストを通して知ることができる。

## 春季特別伝道礼拝　説教者紹介

◆中野　実先生
長野県に生まれる。東京神学大学大学院修士課程修了。日本基督教団茨城教会を経てプリンストン神学校修士課程修了。クレアモント大学院大学宗教学部博士課程修了。現在、東京神学大学准教授。日本基督教団阿佐ヶ谷教会協力牧師、東京女子大学非常勤講師。
【中野先生には五月九日に泉、十日に土樋（朝）の礼拝をご担当いただきました】

◆田中かおる牧師
東京都に生まれる。東洋英和女学院短期大学保育科卒業。社会福祉法人こひつじ会第二小羊チャイルドセンター施設長を務めながら東洋英和女学院短期大学専攻科（保育専攻）修了、東京神学大学神学部神学科卒業、東京神学大学大学院神学研究科博士課程前期課程修了。現在、日本基督教団安行教会主任担任教師。多くの大学・中学校・小学校で教鞭を執りつつ大学院にも在学中。
【田中先生には五月九日に多賀城、土樋（夜）の礼拝をご担当いただきました】

# 「人を生かす生命の言葉」

日本基督教団安行教会主任担任教師
田　中　かおる

一．人間にとって言葉は大切。たった一言でも、その人を生涯、勇気づけ、生きる力となる言葉がある。その一方で、たった一言で、その人の心をズタズタに引き裂き、立ち上がることのできないほどのダメージを与える言葉もある。言葉は、人を生かしもし、殺しもする。この大切な言葉について、二人の日本人が、それぞれ、若い人に向かって発したメッセージを紹介する。

一つ目は「いい言葉をたくさん覚えて使わないと、人間の脳は育たない」という井上ひさし氏の言葉。中学生に対しての公開授業で、人間の脳は言葉を入れることで成長する、という科学的なデータをもとに、「いい言葉にたくさん触れる…それが人間としての脳を育成する」と述べている。

二つ目は「人間にとってなくてはならないのは、言葉。たくさんの言葉を浴びて、その中から真実の言葉を獲得していく。それが人間として育つということではないか。どれだけ質の高い言葉に触れることができたか、それがとても重要。」そういう趣旨のメッセージを大江健三郎氏が、教育フォーラムで若い人たちに向けて語っていた。

どちらも、人間が育っていく上でよい言葉、質の高い言葉にたくさん触れることが大切、と語っている。

二．聖書も「言葉が大事」と語る。本日の聖書の箇所に有名な言葉が記されている。即ち、『人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口からでるすべての言葉によって生きる』（申命記八…三）この言葉は、イエス・キリストも荒野で断食した後、神の子なら、石をパンに変えたらどうか、という誘惑の声に対して、きっぱりと断った時に申命記から引用した言葉である（マタイ福音書四：四）。この言葉の背景には、イスラエルの人々の信仰の体験がある。神がイスラエルの人々を具体的に困難から救い出し、人々の飢えを満たしてくださった体験を思い起こさせ、神の語る言葉は決して口先だけであったり、気休めに過ぎなかったりする言葉ではない、そうではなくて実態のある言葉であることを思い起こすよう、促している。神は、私たち人間を実態のある真実な言葉をもって、実際に養ってくださるお方である、ということを聖書はいろいろな表現をもって証言しているのである。

三．人間にとって言葉が大事、という時には、井上氏も大江氏も、良い言葉、質の高い言葉が大事という。言葉なら何でもよいというわけではない。一方、質の高い、というのは、難易度が高い、という意味ではない。そうではなくて、どんなに言語理解に限度やハンディがあったとしても、質の高い言葉が必要、そういう類いのことである。即ち、良い言葉、質の高い言葉とは、真実の言葉、と言い換えることができる。その意味で、神が私たちに語る言葉は、真実な言葉である。決して、気休めであったり、実態の伴わない言葉ではない。そうではなくて、神が「私があなたの神、あなたを導き神、私があなたを救う」とおっしゃる神の言葉は、真実であり、中身を伴う言葉であり、私たちを生かす生命の言葉である。そして、それは、イエス・キリストをみればそこにすべてが言い表されている。そのイエス・キリストがどういうお方であるか、何を語り、どんなことをし、どんな歩みをしたかを聖書は証言する。聖書から発する人を生かす言葉に、耳を傾けて頂けたら幸いである。

# Revenge and Forgiveness

文学部　デビッド. N. マーチー

Have you ever been so angry at someone that all you could think about was *getting even* with that person? In English, to *get even* with someone is to take revenge against that person. You *get even* with someone when you hurt that person as much as that person hurt you. This is *revenge (or vengeance)*, and it is one of the most powerful and damaging emotions we experience. The desire for revenge can consume us. Revengeful thoughts are a spiritual disease that destroys personal relationships. They are also a common cause of the world's wars. If you have ever wanted to *get even* with someone who has hurt you, that experience has probably also taught you just how destructive those feelings can be in your own life.

The Bible tells us many stories about revengeful feelings and acts, and the stories often do not have happy endings. There is one Old Testament story, however, about a man who discovered the cure for this terrible, spiritual disease called "revenge." The man's name was Joseph, and we read about him in the book of Genesis. Joseph's father was Jacob, and Jacob had two wives. Jacob, however, favored wife Rachel over wife Leah. He also appears to have favored his children by Rachel over his children by Leah. This favoritism caused much ill will and jealousy within the family. Indeed, at one point the sons of Leah plotted to kill Joseph, a son of Rachel. Though they did not follow through on their fratricidal plan, they chose instead to sell Joseph as a slave. This terrible crime against their brother was, at least in part, an act of *revenge*. The sons of Leah sought to *get even* with Joseph because of the favoritism their father had shown toward Joseph, a son of Jacob's favorite wife, Rachel.

Though Joseph began his life in Egypt as a slave, his many abilities eventually enabled him to become a powerful administrator in Egypt, even though he was

a Hebrew and not an Egyptian! During one extremely severe famine, Joseph was put in charge of selling food to Egyptians and others who had been impoverished by the famine. There is a fascinating dramatic twist in the story, however, when Joseph discovers that among those coming to Egypt to buy food are his older brothers from Canaan. It was the first time Joseph had seen them since they had sold him into slavery. What should he do upon meeting his brothers? Should he take revenge on them and refuse to give them food? Should he imprison them for their cruel acts against him earlier?

If Joseph had wanted to "get even" with his brothers, he had the perfect opportunity. However, Joseph chose not to do this. Indeed, by his response to this opportunity, Joseph demonstrated how we too can deal with feelings of revenge, feelings that can destroy our lives. Joseph's solution was not to seek revenge, but rather to forgive his brothers for their sin against him. By the end of this exciting, human interest drama, Joseph has made it possible for his father's whole family to come and live prosperously in Egypt.

Joseph's forgiveness changed the family of Jacob. Previously plagued by deception and revenge, the family was now ruled by love. The next time you are tempted to *get even* with someone who has hurt you, think about Joseph, and think about the power of forgiveness. Forgiving others can change your life, and it can change the lives of those around you, too.

# 各キャンパスのメッセージ

## 土樋キャンパス

大学宗教主任
北　博

青葉が目にまぶしい季節になりました。新入生にとっては、五月病から立ち直って自分のペースをつかみかけるチャンスです。今年泉から土樋に移った三年生の諸君も、新しいキャンパスにだんだん慣れてきたのではないでしょうか。四年生の皆さんは、残り僅かとなった学生生活を悔いのないように過ごして下さい。

ところで東北学院大学では、学生の皆さんがよりキリスト教に関心を持ち、聖書を学ぶことができるようにという願いを込めて、キリスト教学担当の先生方がそれぞれの聖書研究会を持っています。また、夏には宗教部主催のサマーキャンプ（サマーカレッジ）も予定されています。どうかこのような機会を積極的に活用して下さい。それから、毎日の礼拝を生活のリズムのためにうまく生かして下さい。チャペルで賛美歌と祈りと聖書の言葉にリフレッシュされて、生き生きとしたキャンパスライフを送りましょう。

## 多賀城キャンパス

大学宗教主任
野村　信

多賀城キャンパスは、入学式のころは、桜が大変きれいでしたが、すっかり緑の季節になりました。大学の勉強は、高校と違って自主的に取り組み、単位を修得しなくてはなりませんので、多少、戸惑いもあるかもしれませんが、新入生は新しい環境に早く慣れて、充実した毎日を送って欲しいものです。

また大学礼拝も大勢の新入生を迎えて始められました。それぞれの司会の先生たちは、学生諸君たちに出来るだけ良いメッセージを語ろうとしていますので、これからもキャンパスに午前中いる時には、遅刻しないように心がけ、礼拝に出る習慣を大切にして下さい。

なお、チャペルの一階の小部屋で火曜日のお昼に、数名で聖書を読んでいます。今年度は、キリストの「奇跡物語」を学んでいます。キリスト教や聖書について関心のある人や質問のある人も、また誰でも参加できます。ぜひ一緒に短い一時ですが、ここに来てください。軽食付きです。

## 泉キャンパス

大学宗教主任
永井　義之

礼拝は聖書の言葉を聞く機会ですが、これはよく毎日の食事にもたとえられます。生きるのに不可欠な食事は、毎日決まった時間によほどのことがない限り食べるという行為を繰り返していきます。毎回ご馳走というわけではなくても、とにかく食べるのです。生きていくのに欠かせないからです。同じように礼拝における「神の言葉の摂取」も日々の欠かせないものとしてわたしたちの心の習慣となるよう心身を整えたいものです。食物の摂取によって体が成長するのは目に見えますが、目に見えない心も精神的に大きく成長するのです。この食べるという行為は子どもの頃からしているわけですが、子どもの食事風景を見ていると半分遊びながら食べていることがよくあります。そのたびに親には叱られているのですが。しかし、そうこうして食べるという行為を身につけていって大人となるのです。「神の言葉の摂取」としての礼拝にもいくつかの段階を経る必要がありそうです。

# 第三三回サマー・カレッジのご案内

大学主教主任　出　村　みや子

豊かな自然の中で聖書のメッセージに学びながら学生・教職員相互の交わりを深める宗教部主催による恒例のサマー・カレッジはこの夏、「宮城蔵王ロイヤルホテル」を会場に行われます。

今回は、自然を描いた美しい挿絵がナショナル・トラスト運動の原動力となっている『ピーターラビットの絵本』の著者ビアトリクス・ポターと江戸鳥類学者堀田正敦の江戸鳥類図鑑に見られる自然へのまなざしから学びたいと思います。講師の鈴木道男先生〔東北大学国際文化研究科准教授〕は著名な江戸博物学研究者であると同時に、希少鳥類の復元計画をすすめる野鳥保護活動に積極的に取り組んでおられます。

会場近くにある「野鳥の杜自然観察センター　ことりはうす」でのバードウォッチングをはじめ、広々とした敷地内でスポーツを楽しんだり、放牧動物とのふれあい、アイスクリーム作りが体験できる蔵王酪農センターでの自然体験プログラムなど、楽しい企画を用意していますので、皆様どうぞふるってご参加ください。

**○日　時**
七月二六日（木）～
二八日（土）

**○会　場**
宮城蔵王ロイヤルホテル

**○主なプログラム**
開会礼拝、基調講演、
みんなで歌おう、晩祈、
スポーツ、
自然体験プログラム、
閉会礼拝

**○対象**
本学の学生・教職員
（定員四〇名）

**○参加費**
八〇〇〇円

**○締切日**
七月一四日（土）
（定員に達し次第締め切りとなりますので、お早めにお申し込み下さい）

**○申し込み先**
土樋キャンパス
本館二階宗教事務課
泉キャンパス
一号館二階庶務係
多賀城キャンパス
一号館二階庶務係
参加費を添えてお申し込み下さい。

# 宗教部からのお願い

## 礼拝について

～ 特に出席確認（学生証読み込み）を中心として ～

礼拝の出席確認は学生証読み込みにより行っております。

新学期が始まり約二ヶ月がたちました。皆さんも読み込みに慣れてきたと思いますが、より良い礼拝運営を行うために改めて注意点を記します。

ご一読いただき、毎日の礼拝が穏やかに守られますようご協力をお願いいたします。

○手元に学生証を持った（取り出した）状態で読み込み機に並んで下さい。読み込み機の直前で取り出し始めますと渋滞の原因となり、他の方のご迷惑となります。

○順番が来たら速やかに読み込みを行って下さい。数回読み込みを行ってもエラーとなる場合は、係の指示に従って手続きを行って下さい。

○読み込み後は入場し、係の指示に従って着席して下さい。

○入場後は静粛を保って下さい。礼拝堂は友人とのおしゃべりを楽しむ場所ではありません。説教者を通して神のメッセージに耳を傾ける場所であるからです。

○一〇時を過ぎますとオルガン演奏（前奏）により礼拝が開始されます。礼拝は前奏とともに始まります。オルガンの音に耳を傾けて下さい。

○一〇時から礼拝終了までは礼拝堂内のトイレの使用はできません。

○礼拝開始から一定時間経過後、読み込み機の撤去と礼拝堂入口の閉鎖を行います。閉鎖後の入場は出来ません。速やかに入場して下さい。

○礼拝の途中退室はできません。（一〇時二五分を過ぎても礼拝が終了しない場合を除きます）

【補足】

礼拝時間中に体調が悪くなった時などは、すぐにお近くの教職員に声をかけて下さい。

礼拝の出席確認のため学生証読み取り方式を導入してまだ間がありません。色々混乱があるかもしれませんが、どうぞ整然と、なおかつ迅速な読み取りにご協力下さい。

### 編集後記

春の特別礼拝の特集号です。原稿を講師の方々からいただき掲載しました。多くの学生諸君が礼拝堂に聞きに来てくれたことは感謝でした。あいにく聞き漏らした諸君は紙面を通して味わっていただければ幸いです。（NA）